

02-027

発達障害の要支援度評価尺度の当院における実状と課題

石井 隆大、永光 信一郎、山下 裕史朗

久留米大学医学部小児科学講座

【背景】 不登校などの発達障害の不適応を呈する率は、浅岡らよれば、およそ30%とされ、思春期児童の場合は初診時に既に二次障害を来して受診していることが多いと報告している。発達障害の特性別評価票（以下：MSPA Multi-dimensional Scale for PDD and ADHD）は、15項目の要支援度をレーダーチャートにした評価尺度で2016年から保険収載され、視覚的に児の特性を伝えることができる。これにより、学校現場での発達特性を背景に陥る二次的問題の防止が期待される。今回当院でMSPAが実際のどの程度活用され、結果として不適応や学校トラブルなどの好ましくない結果を招いていないかを明らかにする目的に後方視的に調査した。

【方法】 対象は久留米大学小児科外来患者。対象抽出期間：2018年1月1日から2019年12月31日。検討項目：患者情報（年齢、性別、診断名、投薬の有無と種類、合併症）、教育現場へのMSPAのフィードバック方法（意見書、診療情報提供書、ケア会議などのミーティング）、検査施行後不適応や学校トラブルの有無についてまとめ報告する。

【結果】 対象は13名。男女比は、9:4と男児の方が多かった。診断として最も多かったのは自閉スペクトラム症であり、全体で投薬加療を受けている児は7名だった。教育現場にMSPAを用いた環境調整会議は10例に行われていた。不登校であった4例のうち、軽快が得られたのは1例であった。今回のアウトカムは主観的であることが本調査研究の制限であった。

【結論】 MSPAのフィードバックの実情を明らかにした。MSPAの利点は視覚的に特性を捉えることができることで周辺のケア・ギバーや支援者などへの理解を促す一助となる。MSPAがより積極的に利用されるために、他の尺度と比較することで有用性を吟味することが求められる。

02-028

小児糖尿病サマーキャンプの効果と満足度に関する調査研究

古園 美和^{1,2,3,4,5)}、田嶋 華子¹⁾、佐野 透美¹⁾、竹下 輝¹⁾、橋本 康司¹⁾、早川 潤¹⁾、五十嵐 徹¹⁾、川上 康彦¹⁾、右田 真¹⁾、磯島 豪²⁾、小島 あきら³⁾、門脇 弘子⁴⁾、丸山 博⁵⁾、佐藤 詩子⁶⁾、入江 学⁷⁾

日本医科大学武蔵小杉病院¹⁾、
 帝京大学医学部付属病院小児科²⁾、
 さいたま市民医療センター小児科³⁾、
 山王病院小児科⁴⁾、
 松戸クリニック⁵⁾、
 三楽病院小児科⁶⁾、
 東京通信病院小児科⁷⁾

【目的】 小児糖尿病サマーキャンプは、インスリン治療を要する小児糖尿病の子どもたちに集団生活を通じて正しいインスリン注射や栄養等に関し医療教育を行うことに加え、仲間が大勢いると実感できることで精神面での効果が期待されている。今回、小児糖尿病サマーキャンプの効果と満足度を明らかにするためアンケート調査を行い検討したので報告する。

【方法】 2015年のつばみの会サマーキャンプ参加者を対象として匿名のアンケート調査を行った。内容はキャンプに対する満足度（3項目）、血糖コントロールについての理解度の変化11項目、患者の会の会員との関わり合いについて（7項目）の計21項目であり参加者16名中11名（68%）より回答を得た。

【結果】 アンケート回答者の年齢は9歳から16歳で男女比は男子6名（55%）、女子5名（45%）であった。全員が1型糖尿病で、罹患年数は3年以下6名（55%）、4年以上5名（45%）であった。また参加回数は9名（81%）が3回目以下であった。集計結果のうちキャンプの参加前後でインスリン注射ができる部位の増加が顕著であり、この項目に関してキャンプの参加回数、性別、罹病期間からの観点で分けFisherの直接確率検定を行った。罹病年数が3年以下の群は4年以上の群に比較して有意に注射部位を増やすことができていた（ $P=0.045$ ）。参加回数（ $p=0.72$ ）、性別（ $p=0.19$ ）では有意差は認められなかったが、男子参加者6名中1名（16%）に対し女子参加者の5名中3名（60%）が注射部位を増やすことができていた。また回答者の多くが1型糖尿病の患者との交流を肯定的に捉えており、11名中全員が同じ病気の知り合いができてよかったと回答しており、10名（91%）がキャンプ以外でも交流を持ちたい、7名（63%）がインスリン・治療・血糖管理での悩みを相談したい、9名（63%）が食事（カーボカウント等）の悩みを相談したいと回答していた。

【考察】 サマーキャンプはインスリン注射手技の向上に効果があると考えられ、特に罹病期間が短い患児において顕著であった。また手技に加え、精神的な面でも回答者11名中全員が「同じ病気の知り合い・友人ができてよかった」と回答しており、サマーキャンプへの参加は病気と前向きに付き合っていくための手段として重要であると考えられた。